

2024 年度博物館実習報告

瀬川 真由子*, 廣瀬 ゆらら**, 渡部 義弥***

概要

大阪市立科学館では、例年、博物館学芸員の有資格者になるのに必要な博物館実習を実施し、各大学から実習生を受け入れている。2024 年も 9 月 14 日～21 日に 2 名の学生を受け入れ、実習を行った。主としてギャラリートークを実施したが、今回は、その前にトークに慣れスキルを段階的にあげるために、実習生相互の発表、友の会例会での発表の後、展示場での来館者へのトークと進めた。本稿では、実習の概要について指導を行った渡部が述べ、それぞれの実習生の実習を通じての体験や考察を、原稿ママにて報告する。

1. はじめに

大阪市立科学館では、例年、博物館学芸員の有資格者になるのに必要な大学単位になる博物館実習を実施し、各大学から実習生を受け入れている。2024 年度は 9 月 14 (木)～21 日 (木) の開館日 7 日間で 2 名の実習生を迎えて実施した。例年実習生は 5 名前後であるが、本年度はリニューアル業務などのために、博物館実習実施への検討が長引き、募集開始が 5 月になったため、多くの大学は 4 月末で応募させているのと日程がズレたためである。今回の実習生 2 名は、3 月から継続的に実習応募の時期を質問していたもので、実習は行われるという情報に確信を持っていたこともある。以降は実習の応募を 3 月に開始する予定である(本稿執筆時点で実際にそうしていたところ多数の応募があった)

さて、博物館実習については、文化庁によりガイドラインが示されており(文化庁 2024)、偶々の要素もあるが、おおむねそれに沿って行っている(ただし、昨年度の研究報告(朝田ほか 2024)で示した大学担当との連携は未達である。今後に向けての課題としたい。)

さて、大阪市立科学館では、活動の特徴としてプラネタリウムやサイエンスショーをはじめ、学芸員が来館者に直接話す機会が多くなっている。そこで、例年実習生にはギャラリートークを行ってもらうことに

している。

ただし、2024 年は実習生が 2 名とすくなく、相互で発表をシェアすることで教えあうという流れが難しかったため、次のような流れで行った。次第に受け取り手が増え、コミュニケーションの難易度があがる狙いとした。

1. 館長や学芸員への自己紹介
2. 実習生の相互プレゼン(志望動機を中心に)
3. 友の会の例会で、各自の研究発表を 7 分間でプレゼン。
4. 展示場でのギャラリートークの練習と実践

これまでに行っていなかったのが、2 の友の会例会でのプレゼンである。実習生の人数が少なく例会の時間を過度にとらないこともあって実施できた。

また、友の会の会員は一般の来館者よりも、サイエンスに関心が深く、話を聞くことや、質問になれており、実習生のような若い学生へも優しく接して下さることや司会や担当学芸員のサポートが期待されていたので、実施した。

その他に座学なども行ったが、多くの時間をギャラリートーク(図 1、2)に費やした。なお、従来は私服でギャラリートークを実施してきたが、実習生とわかりやすいよう今回はじめて大阪市立科学館の黄色のビブスを着用して実施した。

本稿では 2 名の実習生それぞれがどのような取り組みを行い、またその結果としてどのような考えを持

*近畿大学農学部(学生)

**奈良女子大学理学部(学生)

***大阪市立科学館

ったかを、それぞれの考えにおいて記載することで、実習の一環ともした。また、生のデータでもあるので（不規則な用語使用などについてのみ補正している）今後の実習にも役に立つと思われる。以下、原則原文ママにて掲載する。（ここまで、実習指導学芸員 渡部義弥記載）



図1. 実習生によるギャラリートークの様子



図2. 実習生によるギャラリートークの様子

2. 実習生 瀬川真由子の報告

2-1.はじめに

この度、大阪市立科学館にて、休館日を除いて一週間博物館実習をさせていただいた。

今回の博物館実習では、展示場やプラネタリウムの点検、サイエンスショーの見学、友の会例会の参加、展示場でのギャラリートーク等を通して学芸員の方々の業務内容に触れることができました。また、全ての日程に学芸員の方々と懇話をさせていただく機会があり、より詳しく学芸員の業務を知ることができただけでなく、リニューアルした博物館に込められた想いを感じる事ができました。

以下に、今回の博物館実習で挑戦した、友の会例会での発表と展示場でのギャラリートークについて、その内容や感想を報告する。

2-2-1. 友の会例会の参加

実習三日目に友の会例会に参加し、学芸員の方々の報告や発表を聞くことができた。また、実際に、実習生が一人一つのテーマを自分で決め7分間発表をする機会を頂き、例会に参加されている会員の方や学芸員の方々の前で発表を行った。私は、大学で所属している研究室内の「乳酸菌の単離」という課題に、博物館実習に参加する少し前から挑戦していたため、実際に挑戦して感じたことも踏まえてこのことについて発表することにした。

2-2-2 友の会例会 発表準備

発表の準備や練習では、私と同じように実習に参加していた実習生や学芸員の方から、発表の仕方や使う言葉など多くのアドバイスをいただいた。その中で、自分自身の興味・関心をどんな人にも飲み込みやすく伝えるようにするには、具体的にイメージできるように話すことが大切だと知った。特に私は乳酸菌という目に見えないくらい小さな生物について取り上げていたため、このことを十分に注意し、発表で用いたスライドでは文字は少なめに、写真やイラストを多く用いて制作した。このような力は、友の会例会での発表だけでなく、学芸員としてギャラリートークやサイエンスショーを行う上で重要なスキルだと感じた。

2-2-3. 友の会例会での発表

発表では、初めて例会に参加したということもあり、緊張したが、ゆっくりと聞き取りやすい声で、聴いてくださる方々の顔を時折見ながら発表することを意識して行った。一方で、話すことに意識を集中してしまっただけで、常に直立の姿勢で単調な発表となっ

しまった。友の会例会では学芸員の方の発表も聴かせていただいたが、そこではジェスチャーなど体を使って説明されていて、聴いていてわかりやすかったため、言葉や発表スライドの工夫だけではなく体を使うことでより分かりやすくなると感じた。これから大学での研究も始まり、自分の研究について発表する機会も増えるため、この反省を活かしていきたい。

友の会では、私の発表に対してもメモを取りながら聞いてくださっている方の姿も見られ、会員の方はある特定の分野にだけでなく科学全般に興味をもってこのような例会に参加されていると知り、自分の学びを深めて共有できる場があることに感銘を受けた。

2-3. 展示場でのギャラリートーク

実習後半では、展示場内の展示物を一つ決め、それについてのギャラリートークに挑戦した。私は、今まで元素記号を通してでしか見たことがなかった元素が周期表として実物で展示されていることが、展示物内で一番印象深かったため「周期表の実物展示」についてギャラリートークをすることに決めた。

実際に展示場に出てギャラリートークに挑むと、展示物について説明する以前に、お客様のタイミングや様子を見計らって話しかけることに苦戦した。学芸員の方やガイドの方が実際にギャラリートークをしている姿を見たとき、同じ展示物でも最初の話しかけ方やギャラリートークの内容をお客様の年齢層や展示物を見る様子によって変えられていたため、何パターンか用意しておく必要があると感じた。回数を重ねていく内に、多くのお客様に話しかけ、展示物の説明ができるようになり、説明し終えた後にお客様から質問を受けたり、周期表周辺の展示物の紹介もしてほしいと依頼されたりして、自分の説明で科学について少しでも興味を持ってくださったことに大きな喜びを覚えた。一方で、実習前半の友の会での発表の反省や経験を踏まえて「どうすればお客様にわかりやすく伝えることができるのか」ということを意識しすぎてしまい、実習が終わった今では、周期表や元素の面白さやどうしてそれらを自分自身は面白いと思うのかということも含めて伝えることができれば、より一層、科学の面白さや楽しさを伝えることができたのではないかと感じている。

2-4. 最後に

一週間ほどの博物館実習の中で一番印象に残っている言葉は、実習中に教えていただいた、大阪市立科学館の使命である「科学を楽しむ文化の振興」だ。今回の実習で、友の会の参加や、ギャラリー

トークに挑戦したり、学芸員懇話や朝の点検の時に展示場に込められた想いを学芸員の方から知ることができ、科学を楽しむための工夫が節々から感じられた。実習を通して、多くの人に科学の楽しさや面白さを伝えることができる学芸員になりたいとより一層強く感じた。

3. 実習生 廣瀬ゆららの報告

3-1. はじめに

科学館学芸員について知りたいと思い今回の実習に参加し、非常に貴重な体験をさせていただいた。実習では展示場やバックヤードの見学、講話、学芸員の方々との懇話を通して科学館での業務内容やそこで働く人を知ることができた。また、課題としてプレゼン発表と展示品解説を行なった。以下にその内容と感想を報告する。

3-2. 見学と学芸員懇話

展示場の見学の際、一つ一つ解説を聞きながら進み、自分では気づけなかった工夫を沢山知ることができた。印象に残っているのは展示の順で、4階宇宙のコーナーでは太陽系の惑星の展示に始まり、観測の仕方や原理、銀河に関してというように、一見個々に見えていたものが実はつながりをもって並んでいることに気づいた。学芸員の方々のお話を聞く中で、科学への興味の強さや、科学の面白さを伝えたいという気持ちが強く伝わってきた。

3-3. 友の会例会 プレゼン発表

友の会の方々の前で、各自興味のあることについて7分間プレゼンを行う機会をいただいた。私は身近な自然科学である、雲の発生の仕方と種類について話した。

学芸員の方からヒントやアドバイスを受けながら準備を進めた。何かについて話すとき、目に見える”モノ”があると色々な視点で話を展開できるという教えが印象的だった。雲に関しては写真やイラストを使い視覚的に伝えるのが分かりやすいと思ったので、パワーポイントでスライドを作成した。注目して欲しい点や話の長さを考えて、1枚のスライドに詰め込まないように気をつけた。そうすると雲の写真1枚でも、形・名前・色・発生の仕組み・見られる時期・周辺の地形など視点を変えるといくつも話が出ることに気づいた。

また、表現の仕方によっても伝わり方が変わることを感じた。自分にとって馴染みのある単語でも実は専門用語で一般的には理解しにくいものもある。また何かに例える場合には、自分が分かることでも相

手はイメージしにくいかもしれない。常に対象とする人が理解できるように言葉選びに気をつける必要があると知った。

発表に向けてのアドバイスとして、話す際は一方的にならないよう聞き手の反応を見ることが大切だと教わった。原稿やスライドではなく聞き手の反応を見ながら話すと、頷いてくれたり驚いた表情で見られていたりして、しっかりと聞いてくださっていることに嬉しさを感じた。しかし前に立って一人一人の顔を見るのは容易ではなく、このような時に話を理解出来ていない人を見つけてもう一度伝え直すという対応をとるのはとても難しいと感じた。きちんと伝わっているか確認し、双方のコミュニケーションが大切であることを体感できた。

3-4. ギャラリートーク(展示品解説)

展示場 3 階のステンドグラスや水晶の展示の前に立ち、来館者に展示の解説を行った。見学の際に、ステンドグラスの色ガラスに金属粒子などの微量元素が使われていることを知り、色々な人に魅力を伝えたいと思った。また周囲のガラスの説明や水晶との比較展示も合わせて解説した。どういふものか説明するだけでなく、体験型の装置の使い方を教えたり、立ち止まって考えてもらえるように声かけをしたりした。

3日間何度も実践して試行錯誤を繰り返し、どうしても興味をもって見てもらえるか、疑問を引き出せるかを考えた。こちらから一方的に解説するのではなく、まず見たり触ったりしてもらい不思議に思ってもらいたいと思ったが、そのように働きかけるのはとても難しかった。私自身は解説する際、クイズ形式を用いて来館者の方にも考えてもらう瞬間を作るよう心掛けた。ステンドグラスの各色に使われている金属をクイズにして当ててもらい、同じ階に展示されている金属の実物と見比べてもらえるように誘導した。来館者から生じる疑問は様々で、それに答えるために色々な知識をもち、理解を深める必要があると強く感じた。また、来館者は小さい子どもからお年寄りまでと幅広く、知識量も様々で、相手のレベルに合わせるというのがとても難しかった。

その他、ガラスと水晶との比較展示は偏光板を通して見え方が違うことを示しており、その原理を説明するために天井につるされている模型を用いた。展示場に立っているうちに、一つの展示がその階の様々な展示と結びついていることに気づき、解説の際には一つの展示から別の展示へと視点を広げてもらえるよう心掛けた。

3-5. 最後に

実習は少人数で手厚いご指導を受けられ、また学芸員の方々から本当に沢山の興味深いお話を聞かせていただいた。科学館で働く人々の熱量を間近で感じることができ、好きだけでは務まらない学芸員の様々な面も知ることができた。

発表後には細やかなフィードバックをいただき、自分がまだまだ未熟であることを感じるとともに大変勉強になった。今後社会に出ると人前で話したり、説明をしたりする機会は沢山あると思うので、今回学んだことを活かしていきたい。

参考文献

[1]文化庁、2024 年、「博物館実習ガイドライン」2024年6月版

[2]朝田ほか、2025 年、「2023 年度博物館実習報告」、大阪市立科学館研究報告第 34 号、pp17-2